

多元的な自国史認識を育成する中学校歴史カリキュラムの開発

—地域（琉球・沖縄）の視点から—

Curriculum Development for Junior High School History Classes for Plural Recognition of Japanese History from the Perspective of Okinawa (Ryukyu) Region

島 袋 ゆ い

(名護市立羽地中学校)

I 問題の所在

グローバル化が進行する中、多文化共生社会の実現が要請されている。現在の学習指導要領の改訂は、「知識基盤社会化やグローバル化」による国際競争の加速や「異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性」の増大という社会の変化を踏まえている¹⁾。また池野範男は、「立場が多様化し利害が錯綜してひとびとが同じ立場に立っていない」ために社会認識及びそれに伴う歴史認識も多様・多元化していると論じる²⁾。現在の日本は多様な民族集団や個性ある地域から成り立っているだけでなく³⁾、多様な社会認識や価値をもつ人々によって構成されているのである。このような現状の中、どのような歴史教育が望ましいのだろうか。

現在の日本の歴史教育は、中央政権の交代を中心とした歴史を「正史」として教授する学習が主流であろう。例えば筆者の住む沖縄県は、日本になってまだ130年ほど（1879年の廃藩置県から数えて）であるが、それ以前のはるかに長い歴史は不問に付され、米軍基地の集中化やそれに関連する課題が散在する中で「正史」を学んでいる。これを沖縄の問題に帰してよいのであろうか。

E・H・カーは、歴史というのは1つの社会過程であり、個人は社会的存在としてこの過程に入り込んでいるとする⁴⁾。多様な認識を持ち、多様な立場にある人々が共に生活している現在、「正史」を習得する歴史教育から、多元的な歴史認識を育成する歴史教育、換言すれば、多様な文化や民族アイデンティティ、ジェンダー、階層からの視点を踏まえた歴史教育へと転換する時機ではな

いだろうか。「過去は、現在の光に照らして初めて私たちに理解出来るものでありますし、過去の光に照らして初めて私たちは現在をよく理解することが出来るものであります。」⁵⁾ というカーの言葉を受け止めるならば、過去の多様な人々が入り混じった歴史から現在の社会を捉え、社会的存在として現在に生きる生徒たちが、より望ましい社会を模索しうる歴史教育が必要ではないだろうか。

本稿では以上の問題認識に立ち、「地域（琉球・沖縄）」の視点から、多元的な歴史認識を育成する日本史カリキュラム及び授業モデルを提案する⁶⁾。まず現カリキュラムの問題点とその改善の方向性を示し、筆者が開発したカリキュラムを提起する。次にそのカリキュラムから1つの単元を事例として示し、最後に再び多元的な自国史認識について考える。

II カリキュラム開発の論理

ここではスキルベックに従って、カリキュラムを「授業・学習の計画や授業細目、その他の教育内容について述べられた意図（指導要領のようなものをいうのであろう—筆者注）を指すばかりでなく、この意図や計画が実践に移されてゆく方法まで指す」⁷⁾ものと捉えたい。そうすると、カリキュラム開発の主体は教師であると言えることができる。また近年の学習指導要領の大綱化により学校・教師のカリキュラム編成の可能性は広がっている⁸⁾。

1. 歴史教育における多文化的内容

まず日本の歴史教育における多文化的内容の位

置付けを確認したい。その位置付けを、バンクスのカリキュラム論に適用することで現在の日本史教育の多文化的内容統合の段階とその改善について論じていく。

(1)学習指導要領における多文化的内容

文化的な学習は、わが国の歴史教育においてどのような位置付けになっているのか確認したい。それまで明治期の「領土の画定」を学習する際のみ扱われていた「琉球」が、平成10年版学習指導要領からは江戸幕府の対外関係を学習する中で「アイヌ」と共に扱われることになった。内容の「(4) 近世の日本」では、ア～オの5つの中項目を通して近世の特色を理解することになっている。「琉球」と「アイヌ」が登場するのは中項目「ウ

江戸幕府の成立と大名統制、鎖国政策、身分制度の確立及び農村の様子を通して、江戸幕府の政治の特色について考えさせる。その際、鎖国下の対外関係に気付かせる。」⁹⁾ の内容の取り扱いにおいてである。そこでは「ウの「鎖国下の対外関係」については、オランダ、中国との交易のほか、朝鮮との交流や琉球の役割についても扱うようにすること。また、北方との交易をしていたアイヌについても着目させるようにすること。」¹⁰⁾ と記されている。また『解説』では「「鎖国政策」については、(中略:筆者)長崎でのオランダ・中国

との交易のほか、対馬を通しての朝鮮との交流、中国とのかかわりにおける琉球の役割についても扱う。また、蝦夷地には海産物などを交易しながら独自の文化を築いていたアイヌの人びとがいたことに着目させる。」¹¹⁾ とある。次の平成20年版『解説』になると「(鎖国下の)中国とのかかわりにおける「琉球の役割」、蝦夷地で独自の文化を築いていたアイヌの人々が、海産物など「北方との交易をしていた」ことに着目させ、統制の中にも交易や交流がみられたことに気付かせる。」¹²⁾ と変更されている。江戸時代をより理解するために、幕府と関わる事項において、「琉球」・「アイヌ」が取り上げられていると言える。

(2)バンクスのカリキュラム論

多文化教育の第一人者であるバンクスは多文化的内容を統合したカリキュラムには図1のように4つのレベルが認められるという。¹³⁾

レベル1の「貢献アプローチ」は従来の主流中心のカリキュラムの構造や目標を変革せずに、また民族集団の知識がなくともすぐに取り組むことができる方法をさす。しかしその民族集団の独特な、エキゾチックな面に着目しがちなこのアプローチでは人種主義や差別、権利などといった重要な問題を矮小化させるという問題点がある。

レベル2の「付加アプローチ」は多文化的内容のテキストや単元、課程を従来のカリキュラムに

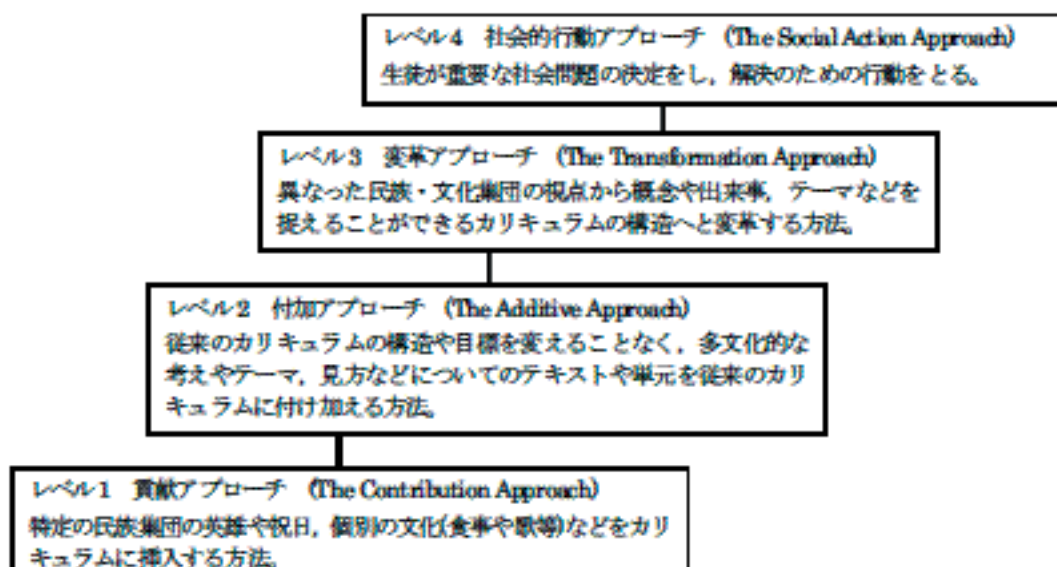


図1. 多文化カリキュラムへの変革のレベル (James A. Banks (1994) p.210)

付加する方法であり、多文化カリキュラムの第一段階であるといえる。しかし従来のカリキュラムの構造、目的を変えない点でレベル1と同様であり、さらに主流中心の基準や視点で特定の事件や出来事が学習内容として取り上げられ、カリキュラム全体の再構成は伴わないという大きな問題がある。

カリキュラムの構造自体を変革し、複数の民族集団の視点で論争や出来事、概念などを捉えることを可能にするのがレベル3の「変革アプローチ」である。このアプローチでは、主流中心の視点や考え方はいくつかの視点の1つに過ぎないことがわかる。例えばアメリカの歴史にとって重要な独立戦争の場合、アングロサクソン、英国擁護派、アフリカ系アメリカ人、先住民、イギリス人といったそれぞれの集団によって意味付けが異なることの理解が必要なのだとバンクスは論じる。

レベル4の「社会的行動アプローチ」は、変革アプローチに生徒の意思決定や行動を追加したものである。社会から排除されている集団が社会の構成員となるために、また民主主義の理念へと近付くために、生徒に社会変革に関わる知識、価値、スキルを獲得させることが「社会的行動アプローチ」の主な目的である。

(3)日本史教育の多文化的内容統合の段階

学習指導要領における「琉球」・「アイヌ」は、カリキュラムの構造を変えることなく付加されているので、バンクスの示すレベル2にあてはまるといえる。多文化カリキュラムの第一段階にいる私たちには、レベル3、すなわち、カリキュラム構造の変革という課題が示されている。

ではなぜバンクスはカリキュラム構造を問題にするのだろうか。氏は学校における知識の正当性に疑問を投げかける。学校で学ぶ社会問題や出来事、概念についての知識は主流を占める民族集団の視点から捉えられたものであり、これらの知識は現状の正当化、差別の合理化につながりやすいと指摘する¹⁴⁾。社会変革に向けて行動するには、社会への批判的な態度が必要であり、よって現状満足に陥らせる傾向にある主流中心のカリキュラムは変革されなければならないと論じるのである。中央政権の視点で描かれた歴史を「正史」として

習得する私たちは、その視点で形成される知識を問い直す必要がある。この過程を経て形成された多元的認識は、独自の歴史をもつ沖縄の生徒にのみ必要な認識ではなく、より良い社会の実現に向けて構成員すべてにとって必要な認識ではないだろうか。次に主流の視点にかわる新しい視点について考えていく。

2. カリキュラム開発の視点

原田智仁は新たな歴史カリキュラムの構想として「東アジア史としての日本史」のカリキュラムを提起する¹⁵⁾。7世紀末、畿内にあった勢力が国号を「日本」と定めて「日本人」が誕生したこと、その「日本人」の実態は諸民族の複合であったこと、また日本列島の地域的多様性、複合性に着目すればオホーツク海沿岸や中国大陆などとの関わりを排除できないという歴史学の研究を引用しつつ示し、「日本人」や「日本史」を自明のものとししない。そしてカリキュラム開発の方向性として荒野泰典・石井正敏・村井章介らによる日本列島の時期区分を提示する。荒野らは「列島の史的展開に対するアジアの規定性に着目し、その強度および質的变化に即して」19世紀末までを10の時期に区分する。その試みは「日本史がけっして自己完結的な一国史に尽きるものではなく、その外に広がる地域との関連性において営まれてきたこと」を示している¹⁶⁾。この時期区分を参考にしたカリキュラムは、バンクスが指摘した知識の正当性を問い直すものとなりうるだろう。

3. カリキュラム開発の方法

カリキュラム開発にあたっては、東アジアとの関連性に基づいて時期区分し、「地域」の視点に立った単元を構想したい。

(1)「地域」を扱う意義

なぜ「地域」か。2つの意義をあげることができよう。網野善彦は弥生時代から古墳時代にかけて日本列島に現れる諸地域を大きく5つに分ける。優位にあった「畿内」の政治勢力が他の地域を支配下に収めながら拡大したこと、関東を基盤に「新皇」と称する平将門による新国家の樹立や、14世紀後半の南朝の親王「懷良」の明への朝貢などを例に示し、「複数の国家が並立したとみてもよい事態」が「単一民族」という「常識」の視点

からは抜け落ちると論じる¹⁷⁾。地域の視点に即して日本史を捉えようとすると、地域の数だけ（あるいはそれ以上の）多元的な日本史ができる。東アジア史としての日本史が、一国史を外から相対化する方法なら、「地域」の歴史は、奥山研二が指摘したように「一国史の内部からその枠組みを切り崩し薄めていくような相対化」¹⁸⁾の方法である。

2つ目の意義は、再検討された「地域」概念から説明できる。濱下武志によるとこれまででは、「国家」を中心に「地域」や「地方」が位置し、「国家」の上位には「国家」同士を結ぶ「国際」関係があると考えられてきた。それは「従来の近代化過程における国家を中心とした分析が、おもには、発展という時間系列のなかで評価されてきた」からだ。その反省と、現在明らかになってきている「地域」の独自性や多様性を踏まえて濱下は、「移動と広がりによってかたちづくられる地域」は、複数の国家や地域を内包し、かつ、ある性質や問題を共有する外部へと広がっているものと捉え、状況や局面に応じて「地域」のつながれ方が選択されるとする¹⁹⁾。現在の社会で起きているグローバルな課題に対しては、この「地域」概念によって対応することが有効であり、またこの概念に依拠すると、多様な「地域」に生きる個人として、「国民」のみではない、多様なアイデンティティをもつことにも開かれる。さらにこの「地域」概念では、「本来人間と自然のかかわりや多様な社会生活のなかで刻まれてきた時間意識」を共有した空間として「地域」を描き出す。「地域」を扱うことで時間を相対化し、「地域」のダイナミズムを導き出すことができると濱下は論じる²⁰⁾。総じて、近代化論の見直しを視野に入れる

ことに意義を見出せる。

(2)「地域」の視点の統合

「地域」の視点を統合するにはどのような方法があるか。第一は日本列島において独自の歴史を展開した諸地域ごとの単元を構成する方法である²¹⁾。この方法によれば、「日本」がアジアの中で、時代とともにどのように成立・拡大してきたかを認識できるだろう。第二は1つの「地域」に着目し、その地域が異質な存在として浮き上がってくる時期を通史的日本史に単元として組み込む方法である。地域の歴史に着目することで生徒の関心・意欲を高めると共に、その地域の現在の社会問題を射程にした学習や、地域とアジアとのつながりに気付くことも期待できる。本来ならば生徒が生活する地域の視点のみに特化せず、「日本」の成立や展開を複数の地域の視点から学べる前者の方法でカリキュラムを開発すべきであろうが、本研究ではその前段階として後者の方法を取り、琉球・沖縄に着目する。それは前者の方法によるカリキュラム開発をするために必要な過程だと思われる。

Ⅲ 年間カリキュラムの構成

前項で示した視点と方法に従い、従前の通史的内容を東アジアとの連動に基づいてなされた時期区分によって再構成し、かつ琉球・沖縄史の単元を組み込んで中学校歴史的分野の年間カリキュラムを開発すると以下ようになる²²⁾。単元の1と2、及び4～6は通史的構成とし、単元3及び7には琉球・沖縄史を組み込んだ。単元3では貝の交易をしていた琉球の先史時代を取り上げ、日本列島の多様性を学習し、単元7では琉球が「日本」になる過程を学習する。

単元名	荒野らの時期区分	学習内容
		(ローマ数字は荒野らの時期区分に対応。育成する多元的認識は枠内に示した。)
1 中国王朝の動向と 周辺諸国の形成	Ⅲ期(6世紀末) Ⅱ期(3世紀末) Ⅰ期(前3世紀後3世紀半ば)	<p>Ⅰ 秦・漢の統一国家による冊封体制は周辺地域の政治的・社会的成長をもたらした。奴国など倭の国々も冊封を受け、東アジア体制の一員となった。</p> <p>Ⅱ 漢の滅亡とその後の分裂抗争は周辺地域に動揺と政治的成長の契機を与え、多様な外交関係の展開をもたらした。卑弥呼や倭の五王の使節派遣もこの状況下で行われ、ヤマト王権は大陸の制度を参考にした支配体制を確立していった。</p> <p>Ⅲ 唐の拡大と安定は唐の東西に律令制的国家群の誕生を促した。ヤマト王権もその1つであった。律令国家へ歩む中で国家の称号を「日本」、君主の称号を「天皇」とした。</p> <div>中国王朝の盛衰に影響を受ける周辺国の1つとしてのヤマト王権に気付かせる。</div>

2 唐の繁栄、弱体化とヤマト王権の対外的孤立政策	V Ⅳ期 (10世紀後半～13世紀始め)	<p>IV 国内外の不安定さ（唐の衰退によるアラブ、中国商人の活発化、ヤマト王権の東方計略の失敗と蝦夷豪族の活躍、天皇を中心とする穢れの世界観の成立など）からヤマト王朝は対外的孤立を選んだ。そのことが日本独自の文化や律令制の発展を促した。</p> <p>V 日本が対外的孤立を維持している間も、中国との交流は途切れなかった。宋の貿易・商業の発展に伴い鋳造された銭貨は日本にも流入した。この期の終わりには日本と高麗で武人政権が誕生した。</p> <p>日本独自の文化や貴族の政治が発展した背景には国内外の不安定要因があったこと、その間にも民間の貿易や僧侶の渡来などの交流は継続され、やがて武士の台頭を導いたこと、東北地方の人々は「蝦夷」と差別され、朝廷軍の侵略に対し抵抗を続けたことに気付かせる。</p>
3 貝の交易		<p>先史時代の琉球では貝を材料にして東アジアと交易をしていた。日本と異なる歴史展開がなされた琉球列島には独自の時代区分があり、北海道も同様である。</p> <p>日本の歴史の時代区分の多様性に気付かせる。</p>
4 モンゴル・冊封・朝貢体制の完成	VⅦ Ⅵ期 (15世紀前半～14世紀前半)	<p>VI モンゴルの版図拡大が続く中、経済的・文化的優位にある江南と日本の交流は拡大した。中国銭の普及は荘園制や御家人制の崩れ、悪党の出現など南北朝の内乱へとつながる一方、東北・蝦夷、九州・沖縄との航路を活況化させた。元を倒した明は倭寇を警戒し海禁制度を取り、周辺諸国に入貢を呼びかけた。</p> <p>VⅦ 永楽帝の時に日本は明と冊封関係を結んだ。朝鮮出兵により日朝関係は緊迫化した。琉球では三山統一後に安定的琉明関係が築かれ、東南アジアの諸地域と同じように中国の人々が居住した。環シナ海の港市や沿岸部では諸民族が入り混じる倭寇が活動した。東北では和人とのトラブルからアイヌの蜂起が起きた。</p> <p>大陸からもたらされた貨幣経済の広がりには日本社会に変化を及ぼした。その状況下で琉球・蝦夷地と日本の経済的関係が強められたことに気付かせる。</p>
5 冊封・朝貢体制のほころびと江戸幕府の「鎖国」	Ⅸ Ⅷ期 (17世紀後半～17世紀前半)	<p>Ⅷ 各地域の自立運動と地域間交流の活発化による明中心の国際関係の解体は、日本の朝貢貿易システムからの離脱、琉球の島津への従属（明以外との貿易が途絶え貿易品の市場を日本に求めざるを得なかった）を深めた。世界的な銀経済は日本に銀生産を促し、それを求める倭寇の渡来により、アジア諸地域やヨーロッパ系の文化が伝播した。島津氏の琉球入り後も明と国交回復できない幕府は、対外関係を「四つ口」に限定・統制し將軍中心の体制を築いて国内外の秩序を再編した。その後の銀産の衰退や金銀流出の抑制、明清交代が日本の自立を決定づけた。</p> <p>Ⅸ 清の遷界令撤廃後、日本は互市国として安定期を過ごしていた。金・銀・銅の流出抑制策によって輸出が終息すると国内の産業や実学が発展した。俵物、金肥の産地である蝦夷地は交易主体から収奪対象となり、またロシアの南下も重なり幕府の直轄地となった。欧米列強の進出は日本を含むアジア各国政府の対応を硬直化させた。例）異国船打ち払い令、蛮者の獄</p> <p>江戸幕府による「鎖国」政策や日本列島の北（蝦夷地）と南（琉球）を幕藩体制下に置く政策は、東アジアの緊迫した対外関係の中でとられた策であることに気付かせる。</p>
6 アジアの近代化と日本のナショナリズムの高揚	X 期 (19世紀前半～19世紀末)	<p>X 欧米列強に強硬姿勢をとっていた日本は、アヘン戦争以後その態度を軟化させ開港した。維新政府は自身の正当性確保のため対外的には和親を、対内的には不平等条約改正と国権拡張(蝦夷地・朝鮮・琉球)を掲げて近代化政策を進めた。士族の反乱の鎮圧後に高まった自由民権運動に対しては天皇を頂点とする国民統合を整備することで対処した。日清戦争に勝利したことにより天皇を軸とする挙国一致意識と忠君愛国意識が、中国・朝鮮への蔑視と共に国民に浸透した。</p> <p>現在の日本を規定している国境、制度、天皇制がこの時期に形作られ、または強化されたことに気付かせる。</p>
7 「日本」になった琉球		<p>中国の冊封体制に参入していた琉球が、薩摩藩の琉球侵略や明治政府の「琉球処分」を経て「日本」に組み込まれたこと、また琉球の人々が国民意識をもつようになる過程を、琉球の視点から捉える。</p> <p>琉球の視点から近代の国民国家形成のプロセスを捉える。国民意識は所与のものでなく、形成されるものであることに気付かせる。</p>

Ⅳ 単元「貝の交易—時代区分を問い直す—」の指導過程

ここでは年間カリキュラムの中から、琉球・沖縄史の視点に立って開発した単元3「貝の交易—時代区分を問い直す—」（4時間相当）の指導過程を提示する。

日本本土とは異なった歴史展開がなされた琉球列島では、「縄文、弥生・・・」という、日本の歴史を論じる際に使用される時代区分は適用されない。日本で弥生時代から平安時代へと移行する中、琉球列島では「貝塚時代」と呼ばれる、漁撈・採集生活を営む時代が続き、貝を材料に九州や本州、北海道、中国大陸、朝鮮と交易を行っていた。貝の交易を行い、日本とは異なる歴史を展開した琉球の先史時代の理解を通して日本列島の時代区分の多様性に気づかせる。

1. 単元名「貝の交易—時代区分を問い直す—」

2. 単元構成と目標

(1)第1時「時代区分の多様性と琉球の貝塚時代」

「北海道・本土・沖縄の歴史展開の概念図」から日本全体で一様な歴史展開がなされたわけではないことに気づく。貝塚時代の琉球列島の人々の生活と食事を再現した模型から、発達したサンゴ礁を利用した漁撈中心の生活を営んでいたことを理解する。

(2)第2時「貝の交易の繁栄」

名護市^{うふどうばる}大堂原遺跡の貝溜り及び沖縄と九州の遺跡からの出土品を観察し、貝の交易が行われていたことに気づく。また日本における弥生時代から古墳時代への移行が貝の交易にも変化を及ぼしたこと、また貝の交易の広がりも理解する。

(3)第3時「貝の交易の衰退と再興隆」

螺鈿工芸を発達させた唐、その技術を輸入した日本からの貝の需要が再び高まり、貝の交易に再興隆をもたらしたことに気付く。第1～3時の学習を踏まえて、貝の交易を通じた東アジアと琉球の関係や、琉球の貝塚時代の特徴を説明することができる。

(4)第4時「時代区分の問い直し」

北海道の先史時代の様子、日本での稲作の広まり方を概観し、時代区分の多様性を理解する。時代区分についての自分自身の考えの変化を説明することができる。

3. 指導過程

	問い (○は主発問、・は補助発問)	資料	教授・ 学習活動	予想される意見 生徒から引き出したい知識
(第1時) 時代区分の多様性と琉球の貝塚時代	○日本の歴史はどのように時代区分されているだろうか。	1	T 発問する S 答える	・縄文、弥生、古墳・・・と社会の特徴の変化に基づいて区分されている。
	・この時代区分を改めて考えていこう。日本の歴史展開の概念図を見て気付いたこと、不思議に思ったことはないだろうか。		T 資料提示 発問する S 答える	・地域によって時代区分の仕方が異なる。・沖縄は従来の時代区分が当てはまらない。
	○なぜ従来の時代区分は、沖縄には当てはまらないのだろうか。		T 問題提起	・「・・・」
	・日本で縄文時代から弥生時代へ移行する特徴は何であったか。	2 3	T 発問する S 答える	・稲作、鉄器の広がりによる社会の変化。
	・沖縄は弥生時代に移行せず、貝塚を形成する貝塚時代が続いた。貝塚の出土物の調査結果をもとにして造られた模型からどのような社会であったことがわかるか。		T 資料提示 発問する S 答える	・サンゴ礁内外に生育する豊富な魚介類・海藻や、亜熱帯植物の実などを取る漁撈・採集生活を営む社会であった。
	・次の時間は貝塚時代をさらに詳しくみていこう。		T 次時の 予告	

〈第2時〉 貝の交易の繁栄	○名護市大堂原（うふどうばる）遺跡の弥生時代の層から、同じ種類の大型貝だけが集められている貝溜りが見つかった。多種類の貝が乱雑に放り込まれた所と同じ種類の大型貝だけがまとめられた状態で集められる所があるのはなぜだろう。	4 5	T 資料提示 発問する S 予想する	・食べるための貝なら食べた後は使用済みとして乱雑に捨てられる。同じ種類だけまとめられているのは、食べる以外の目的を持って集めていたのだろう。
	・人工的な孔がある貝の貝溜りも出土した。なぜ当時の人々は孔を開けたのだろう。	6	T 資料提示 発問する S 予想する	・貝を何かの道具として使ったのではないか。
	・大堂原遺跡から九州産の弥生土器が出土した。なぜ九州産の土器が沖縄で出土するのだろう。	7	T 資料提示 発問する S 答える	・九州と沖縄に交流があった。土器に何かを入れて交換していたのではないか。
	○貝の腕輪をした人骨が福岡県の弥生時代の遺跡である立岩遺跡から発見された。九州では生育しない琉球以南の大型貝であることが分かった。当時の琉球列島と九州はどのような交流をしていたと考えられるか。	8	T 資料提示 発問する S 答える	・九州弥生人と琉球の人々は貝を材料にして交易していた。
	・資料8の人物は右手に14個の貝輪を装着していることから、労働を行わない身分の高い人物と考えられている。なぜ身分の高い人が南島産の貝を装着したのだろう。		T 発問する S 答える	・九州では入手できない稀少なものを身につけることで、自分自身の権威を示した。
	○琉球産の貝の分布図から、貝の交易はどこまで広がっていたことがわかるか。	9	T 資料提示 発問する S 答える	・九州、本州、北海道、朝鮮半島などと貝の交易によるつながりがあった。
	・5、6世紀には腕輪を装着する人骨の出土は近畿に増えた。また材質が貝から青銅器にかわった。なぜだろう。	10 11	T 資料提示 発問する S 答える	・古墳時代には、近畿に有力者が現れ始め、彼らの威信を示すものとして青銅器が使われた。
	・琉球と日本の貝の交易はどうなったと考えられるか。		T 発問する S 予想する T 考古学界の定説を説明する	・古墳時代になって貝の需要は減ったため、交易・交流はなくなったのではないか。 ・琉球列島は停滞的な狩猟・採集社会になった（と歴史学界では考えられてきた）。
	○最近では「停滞的な漁労・採集生活」との見方が考え直されている。琉球列島の7～8世紀の遺跡から、ヤコウガイばかり（加工途中も含む）が出土し、唐の貨幣（開元通宝）が出土した。当時ヤコウガイを使っていたのは東アジアでは唐だけである。この3つから、貝の交易にどのような変化があったと想定できるだろうか。	12 13	T 資料提示 発問する S 想定して答える	・螺鈿工芸品を作っていた唐はその材料のヤコウガイを琉球に求めた。唐から来た人々は貝の対価として開元通宝を持ってやって来たのではないか。（この新しい仮説が考古学界から提起され議論を呼んでいる。）
	・唐の衰退後は日本からのヤコウガイの需要が増えた。なぜだろう。		T 発問する S 答える	・螺鈿工芸品の技法が日本に伝わり独自に発展させる中でヤコウガイの需要が増えた。
〈第3時〉 貝の交易の衰退と再興隆	○当時の東アジアにとって琉球はどのような存在だったのだろう。		T 発問する S 答える	・唐や日本、朝鮮半島近海では獲れない、稀少な大型貝を産する地域。
	○唐や日本の社会の変化と貝の交易にはどのような関連がみられるか。		T 発問する S 答える	・稀少な貝は唐や日本で重要な役割を果たしたが、需要の増減に貝の交易も左右された。
	○貝塚時代の特徴は何か。		T 発問する S 答える	・漁撈・採集生活を営み、貝の交易によって東アジアと結び付いていた。

<p>〈第4時〉 時代区分の問い直し</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 再び概念図を見ると、北海道も従来の時代区分が適用されていないことがわかる。北海道の先史時代の生活を模型で確認しよう。 	1 14 15	T 資料提示 発問する S 答える	<ul style="list-style-type: none"> • 北海道ではサケを獲って天日干しや燻製にし、ウニやいくら、ヒグマなどを狩猟・採集していた。
	<ul style="list-style-type: none"> • 次は概念図の「本土」について考えよう。稲作が日本に伝わった時期は前10～9世紀頃に遡るのではないかという研究がある。その説を踏まえると、弥生時代の特徴である稲作の広まり方は地域によってどう異なっているだろう。 	16	T 発問する 資料提示 S 答える	<ul style="list-style-type: none"> • 西日本には比較的速く広まり、東日本にはゆっくり伝播している。 • 関東地方よりも、距離的には遠い東北地方に広まるのが速かった。
	<p>○概念図やこれまでの学習は、あなたの時代区分についての理解を変化させたか。どのように変化させたか。あるいは変化しなかった理由は何か。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 班で意見を発表しよう。 		T 発問する S ワークシートに記入する S 発表する	

4. 教授資料とその出典

1 「北海道・本土・沖縄の歴史展開の概念図」(新城俊昭『ジュニア版琉球・沖縄史』東洋企画, 2008, p.4), 2 「2000年前の琉球のムラの模型図」(国立歴史民俗博物館『新弥生紀行—北の海から南の海へ—』朝日新聞社, 1999, pp.46-47), 3 「再現した琉球のムラの食事」(同上書, p.65), 4 「名護市大堂原遺跡の貝溜り」(名護市教育委員会文化課より写真提供), 5 「貝殻」(木下尚子『南島貝文化の研究 貝の道の考古学』法政大学出版会, 1996, p.47), 6 「孔が開いている貝殻」(山崎純男「貝のきた道」『図説発掘が語る日本史第6巻 九州・沖縄編』新人物往来社, 1986, p.133), 7 「大堂原遺跡から発掘された弥生土器」(名護市教育委員会文化課より写真提供), 8 「立岩堀田遺跡第34号甕棺内人骨と副葬品」(山崎純男, 前掲論文, p.127), 9 「運ばれた南の貝」(国立歴史民俗博物館『北の島の縄文人—海を越えた文化交流—』2007, p.65), 10 「桜馬場遺跡(佐賀県)で見つかった腕輪」(森浩一『図説日本の古代第3巻 コメと金属の時代』中央公論社, 1989, p.35), 11 「琉球産貝輪の分布の変化」(木下尚子「装身具から威信財へ」『弥生時代の考古学4 古墳時代への胎動』同成社2011, p.175), 12 「加工途中のヤコウガイ」(安里進「琉球王国の形成と東アジア」『日本の時代史18 琉球・沖縄史の世界』吉川弘文館, 2003, p.98), 13 「久米島出土の開元通宝」(沖縄県教育委員会『概要 沖縄の歴史と文化』2000, p.15), 14 「再現した統縄文文化のムラ」(国立歴史民俗博物館『新弥生紀行—北の海から南の海へ—』朝日新聞社, 1999, p.44), 15 「再現した北の島の食事」(国立歴史民俗博物館, 同上書, p.64), 16 「水田稲作の広がり—中国から日本列島へ—」(国立歴史民俗博物館『弥生はいつから!?—年代研究の最前線—』2007, p.32)

V. おわりに

本稿では、東アジアと日本列島の関連性を踏まえて時期区分し、「地域」に着目した単元を通史に組み込むことによって、多元的な自国史認識の育成を可能とするカリキュラムを開発した。バンクスの変革アプローチにより、正史としての「日本史」カリキュラムを脱構築する視点と方法を提示したことに本研究の意義はある。本研究のカリ

キュラム開発は荒野らの時期区分を基にしているため、19世紀末までの構成となっている。しかし二度の世界大戦やその後の冷戦が沖縄や日本、アジア、世界に与えた影響は大きく、また視点を変えると大きく歴史認識が異なる歴史的事象でもある。現代史のカリキュラム開発が今後の課題として残されている。

多様な民族集団、多様な立場や利害関係にある

人々で構成され、またグローバル化の進行と共にますます多文化化する日本社会において、「正史」を学び、1つの歴史認識を習得することは果たして今後も可能であろうか。それは現実社会と歴史教育のかい離を広げるものとならないだろうか。現実を直視し、異なるバックグラウンドをもつ生徒ひとりひとりの過去との対話を尊重するならば、自国史認識は必然的に多元的なものとなろう。よって、多元的な自国史とは琉球・沖縄といった「地域」の視点から捉えた日本史だけではない。ジェンダー、身分や階層、エスニシティなど、多様な視点を取り入れることでその都度、新たな「日本史」へと再構成されていくものだと思う。その意味において、琉球・沖縄史にこだわり続けると共に、そのこと自体を批判的に捉えるまなざしも必要である。そのことを自らに戒めつつ、開発したカリキュラムの実践と再構成につなげていきたい。

【註】

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版, 2008, p.1
- 2) 池野範男「多元的な歴史の開かれた再審」『社会科教育』No.460, 明治図書, 1998, pp.40-41
- 3) 網野善彦「日本論の視座」『日本民俗大系1 風土と文化』小学館, 1986, p.71
- 4) E. H. カー著, 清水幾太郎訳『歴史とは何か』岩波書店, 1962, p.77
- 5) 同上書, p.78
- 6) 多元的な歴史認識の形成に向けた実践として、民衆の視点から歴史の多層性や日常性等に迫る原田智仁の社会史的視野に立つ教育内容開発や、子どもたちに複数の歴史理論を発見・吟味させる児玉康弘の解釈批判学習が挙げられるが、本研究では地域の視点から歴史を捉え返すという方法をとりたい。なぜ地域か、については後述する。
- 7) 文部省『カリキュラム開発の課題(カリキュラム開発に関する国際セミナー報告書)』大蔵省印刷局, 1975, p.8
- 8) 川口広美「「カリキュラム研究」からみた社会科研究の特質と課題」『社会科教育論叢』第48号, 2012, p.43
- 9) 文部科学省『中学校学習指導要領』大蔵省印刷局, 1998, p.23
- 10) 同上書, p.27
- 11) 文部科学省『中学校学習指導要領(平成10年12月)解説—社会編—』大阪書籍, 1999, p.99
- 12) 文部科学省, 前掲書1), 2008, p.79
- 13) James A. Banks (1994), *Multicultural Education: Theory and Practice* (3rd ed.), pp.206-210
- 14) *Ibid.*, p.149
- 15) 原田智仁「社会科における多民族学習」(社会認識教育学会『社会科教育のニュー・パースペクティブ—変革と提案—』2003 明治図書出版株式会社 p.197) なお、後述する本研究におけるカリキュラム変革の方向についても原田の提起を受けている。
- 16) 荒野泰典・石井正敏・村井章介「時期区分論」『アジアの中の日本史 I アジアと日本』東京大学出版会, 1992, pp. 11-57
- 17) 網野, 前掲書3), p.71
- 18) 奥山研二「高校日本史カリキュラムの変革—「中規模地域史」の構想を基盤として—」『社会科研究』第48号, 1998, p.64
- 19) 濱下武志「歴史研究と地域研究—歴史にあらわれた地域空間」『地域の世界史1 地域史とは何か』山川出版社, 1997, pp.19-23
- 20) 同上書, p.25
- 21) この方法によってカリキュラム構成試案を提示している研究に奥山の研究がある(奥山, 前掲論文)。中央政権の相対化が試みられているが、その中央政権に影響を与えたアジア諸地域への視点は弱いように思われる。
- 22) ここで示した年間カリキュラムは通史的内容に基づいていないように思われるかもしれない。しかし通史的内容に基づいていながらもそれにとらわれすぎることなく、東アジアと日本の連動した歴史に着目することを通して主流中心の視点で描かれた日本史を脱構築することを目的にして作成している。多くのご意見や批判をいただき参考にして、修正・改善していきたい。

